

親の本音の拾い方 — 担任への不満

4 手づくりパズル

よりよい学校づくりのための塾からの提案④

花まる学習会代表 **高濱正伸**



著者紹介 1993年、小学校低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を設立。「小学までに育てたい算数脳」ほか、著書多数。近年、公立学校への支援にも力を入れている。

◆公立小で授業…二年目

塾として、公立小学校の支援に入って一年。独自のスタイルの「思考力授業」は、少なくとも児童たちには、「楽しい時間」として受け入れられた。

「楽しくなければ」、つまり「本人たちが『やる気』の状態にならなければ」思考力指導などしても仕方ないというのが持論なので、97パーセントの子が「楽しかった」と答えてくれたことは、嬉しかった。第一関門はクリアである。

しかし、アンケートを見ると、「高濱先生の授業はとも楽しそう。しかし、家では全くもっていつもの状態で、変わらない」という声が、全体として読み取れた。「深く考える経験」の総量を増やすことが、思考力をあげることは間違いない。家庭でも、少しでも、そのような時間を増やさね



ばならない。これが二年目の目標となった。

◆問題作成

一年目から、やっていなかったわけではないが、問題作成を家庭でやってきてもらうことに、力点を置くことにした。

具体的には、最初に、もともとも真似して作ることが易しい（できた問題は、決して解きやすいわけではなく、超難問などでもできる）パズルを説明し、それを多く作成提

出してもらうようにした。

次に、その中から数問をピックアップして、「手づくりなぞペー」とネーミングし、市販のドリルのようにレイアウトもきちんとした問題として、こちらでコンピュータに打ち込み、印刷して、毎月全校生徒に出すプリントに掲載した。

そのままコピーされて配られても嬉しいものだが、まるで出版物のような形になって、しかも自分の名前が載っていることは、子どもはとも誇らしい。

配ったとたんに、何人かが「わあ、〇〇君のが載ってる」と、口々に言う。それは大きな声ではないが、言われた当事者の子は、もう舞い上がらんばかりの気持ちになるのだ。

このことは、本人はもとより、他の子の出題意欲をかきたてることにも成功した。

ながら。そのような動きの結果として、青木小でも、非常に独創性の高い問題を作る子が、

出始めた。たいていは、どこかのパズル本の問題を素材に、変更を加えたようなものが多かったが、中には、プロの私でも全く見たことのない問題も出てきた。

そういう場合は、率直に授業でもほめていった。すると、感想の中に「J君ほどのいい問題は作れないけれど……」とか「J君はすごいです」と書く子も出てきた。問題作成におけるスター誕生である。

五年生のJ君は、このことよって、短期間に、変貌をとげた。まじめだが特に目立たない印象だったのだが、極めて自信あふれるオーラに包まれた感じになった。

これは大きなことで、こういうモデルができることで、他の児童のやる気が明らかにアップした。群れを先頭で引つ張る鳥のごとく、彼の存在がクラスも、五年生全体も引き上げてくれたのだ。

まあ作ってはいたという程度の子が、骨っぽい作品を作るようになったし、ほぼ全く作らなかつた子が、作ってくれるようになった。そして、この学年は、解く力も前

大きく作る家

正方形の家が建っています。家の周りには木が立っています。この木にぶつからないように家を大きくしましょう。

ただし、家は正方形のまま。地下や公団など下に広げることができません。どうしたら木にぶつからず、家を大きくすることができるでしょうか。

図解：正方形の中心に「家」とあり、四隅に「木」のマークがある。周囲には点線が描かれている。

NR 66 作成

に出て説明する説明力も、全体として大きく伸びていった。

◆「基礎学力」という新たな課題

さて、二年間が終了し、年度末に取ったアンケートの結果は、ほぼ一年目同様に、良いものだった。問題作成も、前年とは比較にならない成果を得た。

さてしかし、新たな課題が見えてきた。それは「基礎学力」である。「問題文を読み取る」という点で出遅れている子がいる。こういう子を少しでも全体として減らし、総体として基礎部分をレベルアップすることが、思考力の授業をやっている意義を、高めるであろう。

三年目。これまで通りの月一回の「思考力授業」に加えて、新たな取り組みに着手することとなった。

一年目とは、比較にならない数の問題が出されるようになった。特にいくつかの学年では、明らかに先生が、この手づくりパズル運動を支援してくれているのを感じた。先生ご自身が提出されることもあったし、なんと言っても提出数がとも増えた。本当にありがたかった。

◆スターの出現

問題作成は、もともと花まる学習会の中でも推奨してきたことで、いくつかの作成事例を紹介した、『手づくりパズルのすずめ』（草思社）という本を出しているくらいである。

したがって、会員児童が作った問題もたくさんある。そこで、プリントに載せる問題のいくつかは、もともとのなぞペーで、残りは、青木小学校の子の作った問題と、花まる学習会の子が作った問題を、半分ずつ載せるようにした。

これは、意外な効果があった。先行している分、花まるの子の問題には、オリジナルティが高い問題が多い。すると、高学年の子の中には、それがどうしても解けないと、仲間同士で、授業後も取り組んでいる姿が見られた。「花まる、強え」と言い